

五日朝から追撃に移った高橋支隊は、七日朝デナルピアン（マニラ湾とスピク湾の頸部の要地）に進出した。

以上のように防衛庁防衛研究所著の戦史叢書（？）に記されている。従って、この戦況は、野戦重砲第八連隊（高橋部隊）がパラック北部の激戦後の進撃の概要である。

バタアン半島及びコレヒドール要塞付近に集結した米比軍は、駐比米師団、第一、第三十一師団及び要塞砲部隊で、その兵力は約三万五千、ほかに第十一、第二十一、第四十一、第五十一、第七十一、第九十一師団の敗残部隊、戦車二個連隊など五千ないし一万で合計四万ないし四万五千人及び戦車約四〇両と判断されていた。

しかし、バタアン半島攻略戦は応急的であったため第一次攻略戦はとん挫してしまつたと言つていい。比島攻略戦は、ジャワ島の攻略のように一気呵成にはいかなかった。大本営は、バタアンによって頑強に抵抗

している米比軍に対しては、十分な準備をし、相当の日数を要すると判断していたが、南方軍は、比島攻略軍である第十四軍にあくまでもバタアン、コレヒドールを同時に戡定させようとしていた。

また、同時にミンダナオ島も戡定できる目途がたつたので、第十四軍に現兵力をもつてバタアン攻略に全力を傾注させれば、大本営の希望に沿えることとなるなど、第二次戦開始となつた。

比島ネグロス島の死闘

地獄谷からマンガラガンを越えて

茨城県 齊藤 藤左衛門

今次大戦には幾つかの山があつた。比島ネグロス島の戦いもその一つである。

昭和十九年六月十五日、東部第三十七部隊で軍装検査を受け、宇都宮東部第三十六部隊、高崎東部第三十八部隊とともに東部第四十二部隊に集結編成された。

隊長・柿沼善光中尉、小隊長・川又精少尉、衛生兵は大野半十郎衛生二等兵と私の二人である。医務室から薬品、衛生機材などを受領し出陣の準備が完了した。六月十八日朝、梅雨空の下東部第四十二部隊出発、水戸駅から乗車、軍用列車は西へばく進する。途中「虫垂炎患者」が発生し、岡山駅に下ろして下関に向かうという事故があった。

下関で二日待機するため、門司に向かい、そこで一万トンの「日蘭丸」に乗船した。二日の船上生活であったが「日蘭丸」を下船、下関に帰り、民家に十日ぐらい待機した。(「日蘭丸」ではミンダナオ島で散華した同郷の宇都木広さんに会った。思い出の一つである。)十日後乗船命令が出て一万トン級貨客船「香椎丸」に乗船した。船倉に頭がつかないくらいに段に積みこまれ、避難用具は縄梯子であった。船室は風通しが悪く、とても蒸し暑かった。

七月二日いよいよ出港。バシー海峡の状況が悪く、台湾の基隆港に待避、二日後出港し、マニラに向かった。船団は、不気味な藍色に染まった魔のバシー海峡

を全速力で航行した。

七月十二日「香椎丸」の直前を航行していた「日蘭丸」に敵潜水艦の魚雷が命中し、船体が中央から真っ二つに折れ、乗船している兵が海にこぼれ落ちるのを目撃した。ああ、ここが戦場だと見せつけられ身が引きしまる思いだった。

海面には重油が広がり、なげだされた兵、負傷した兵、もがき苦しむ兵を救助し、応急処置するのに甲板はごった返していた。周囲には駆逐艦が爆雷を投下し、敵潜水艦の接近を防いだ。後始末を海軍に頼み、心残りながらマニラに向け全力航行した。

故郷を出て一カ月、七月十五日にやっとマニラの土を踏むことができた。船中の蒸し暑さが本物の暑さにとってかわった。

さっそく、荷揚げをしてマニラ郊外の学校を宿舍とした。これから何年間、この異郷の地にどんな運命が待っているのかと思うと心細くもあった。本科の兵隊は休養していたが医務室は忙しかった。

柿沼隊長が船中で発熱した。マニラ病院で診断した

結果入院となる。これが隊長との最後の別れとなった。

やっと上陸したばかりなのに前途を思うと心細いきわみであった。医務室は兵站や病院と忙しい日が続いた。

七月二十四日、セブ島に転進し、バザック小学校を宿舎にした。七月二十八日編成替えあり。私たち混成第三十一旅団は新たに第百二師団となった。副栄眞平中將が師団長となり、セブ市に師団司令部が置かれた。

サイパン陥落後、各地に防備の責任を持つ「軍」の単位が必要になり、それで七月二十八日に第十四軍は方面軍に昇格した。しかし兵力は第三十五軍だけだった。第三十五軍司令官に宇品の船舶司令官だった鈴木宋作中將が補せられ、友近美春少將が軍參謀長に任せられた。我々は歩兵第七十七旅団長・河野毅少將指揮下の旅団作業隊となった。

セブ島では、二回討伐に参加し、その後バナイ島に移動した。作業隊本部はイロイロ市にあり、その主力はカバツアン飛行場の設定だった。また作業隊は九月二日ネグロス島に上陸、バコロド市の中心バコロドハイスクールの第七十七旅団司令部の建物に入った。作

業隊の主力は周囲の警備で、医務室は司令部医務室勤務となった。

その頃、作業隊に衛生下士官八尋善次伍長と中村久造衛生兵長、若島敏夫衛生一等兵が転属してきた。旅団司令部には南、小島両衛生上等兵がおり医務室も充実した。

九月十三日からバコロド、タリサイ、シライ、サルビヤなどの飛行場に米軍機による爆撃が開始され、ここにネグロス島の攻防戦の幕は切って落とされた。戦争が終わり冷静に振り返ると、米軍による空爆、艦砲、戦車、陸軍の各装備は無敵といえるほどの量があり、ネグロス島の我が軍の最大の火器は野砲二門と高射砲六門、糧秣も砂糖きびの作付けが多いため最初から少ないところを補給路を断たれ、やっと山裾に運んだ物資を最初の砲爆で失ったため、飢餓に追い込まれた。また食塩が初期から無かったため兵の体力が失われてしまった。

九月二十日、我ら初年兵も星が二つになる。作業隊はウバイに移動し、敵米軍の上陸予想海岸水際陣地構

築に専念した。現地人、水牛などを総動員し、早朝から夜半までの作業だ。器材分隊は鍛工場を作りエンピ、カスガイを作った。

柿沼隊長が部隊追及中、戦死したとの訃報が届いた。二代目隊長・川田清中尉が小堀隊から着任した。米軍の空襲は激しく、B 29 五〇機がバコロド飛行場を爆撃。爆撃後の飛行場の修理が大仕事だった。作業隊にレイテ島作戦参加の命が下る。乗船予定前日の夜、船が爆撃で沈没、作業隊はバコロドに留まった。爆撃は市内にも及び、司令部衛兵中の小林源吉が爆撃の破片が頭部鉄帽を貫通して戦死。日一日と圧迫感を抱いた。

その頃、蘭印から転送された燃料のドラム缶をトラックに積む作業中、米軍機五〇機が頭上を通過したので、トラックが急発進したため、ドラム缶の下敷きとなり、藤木房次郎上等兵は腸が破裂し重傷、三日後に他界した。

米軍は夜間爆撃の神経戦をはじめた。爆撃ごとに軍票の価値が下がり、現地人との取引に差し支えが出た。軍票の取引を断られはじめたのだ。追い詰められた中

で昭和二十年の元旦を迎えた。今年こそ反撃をと誓い祖国に向け礼拝した。繰り返し米軍による爆撃を受けても友軍機は姿を見せなかった。

一月十日から作業隊は高千穂落下傘部隊とともに二本椰子からバコ川上流方面の討伐戦に参加、米軍上陸に備えて太郎山に通ずる道路と兵団戦闘司令部の構築準備である。二月に入り戦闘司令部構築にかかった。

石山に横穴を掘る作業である。食糧器材は道路不備のためバコロドから人力で搬送した。途中、艦載機による機銃掃射にあった。死にもぐるいとはこのことだった。そのうち工兵隊により道路が作られ、各大隊も太郎山に向けて糧秣器材を運びはじめた。

戦況は日一日と、逼迫してきた。三月二十八日石川兵長を長に体力の優れた十五人がバコロドに下り、作業隊の残務整理を行った。衛生兵は私。三月十八日衛生上等兵を命じられ張り切っていた。整理後海岸に出ると、バコロド沖は米艦船で埋めつくされ、米軍上陸は時間の問題と思われた。

二十九日未明、艦砲射撃が始まり、宿舍の上を艦砲

がうなり音をたてながら山に向かって飛んでいった。さっそく、石川兵長が司令部に行くと言業隊は別命あるまで待機せよとの命だった。そのうちに市街地には戦車のご音が響きだした。以前の話によると、米軍上陸のときは、バコ川鉄橋を師団工兵隊の手で爆破すると聞いたが、戦車は街に進入している。このままでは我々の脱出が危ぶまれる。再び石川兵長が司令部に行くともぬけのからだだった。これでは包囲されてしまふと急ぎ市外に逃れた。

市街の上空は艦載機が機銃掃射を繰り返していた。逃げ遅れた兵隊を狙い射ちにしていた。後で知ったが、鉄橋爆破は工兵隊の手違いだったそうだ。我々が山に三日目にたどりつく途中、螢が大群乱舞していた。ゲリラの機関砲が山に向かって、五発に一発の曳光弾が山に吸いこまれてゆくのが思い出される。山に近づくと各方面から散り散りになっていた兵隊たちが集まり大混乱だった。山を下るときは、青々とした双葉台あたりの山裾は焼けただけ、硝煙の臭いが鼻を突いた。医務室の人事が新たに発令された。中村衛生兵長は

野戦病院に、大野衛生上等兵が一個分隊とともに旅団司令部勤務、八尋班長と若島上等兵は軽症患者を連れて後方に下がり、私は指揮班で川田隊長の下で働くことが発令されていた。このとき、兵団の前線配備が決まった。太郎山陣地を中心にタンザ地区を寺田兵団、右地区に野瀬大隊、中地区に堀大隊、予備隊は石毛少佐の船舶工兵隊だった。

連日連夜の苦戦が続いた。旅団作業隊は戦車に肉迫攻撃を命じられた。米戦車は前方五〇メートルくらいを火炎放射器で焼きながら前進してくる。兵を犠牲にしても効果はない。太郎山に陣を構え、たこ壺（戦場に掘った一人用の壕）を掘った。いよいよ山岳戦に入る。周囲は空を覆うラワンのジャングルである。他部隊は夜間の切込隊の成功があったが、米軍は気配を感じると照明弾を打ち上げはじめたので効果がなくなった。落下傘が付いた照明弾は滞空時間が長く、日本兵が近づくと狂ったように射撃してくる。昼間は低空の観測機が観測していて、砲の陣地に無線連絡し集中攻撃をかけてくる。観測機は小銃でも届くほどだが、こ

こちらの居場所が知られお返しが来るので手が出なかった。

その頃から艦載機が落下傘爆弾を落としてきた。今度は太郎山陣地が砲撃を受けて、荒川喜一が胸部に破片を受け、息がもれてしまうという。重傷だが担架もなかったので、私が肩をかけて、あと一人に巻脚絆を越中のようにして引き、やっと野戦病院に送った。野戦病院もごった返していた。

陣地に引き返す途中で、作業隊員にあった。聞くと我々の陣地は集中砲を浴び、やっと逃げてきたところとだった。私の装具はそのままと聞き、取りに行こうとすると危険だから夜まで待てという。夜に取りに行くくと装具はあったが、木は倒れラワンの葉は無く、負傷者が出ないのが不思議な情景だ。私のたこ壺に戻ると近くに不発弾がありゾツとした。荷物をまとめ、本隊に戻ると剣ヶ峯方面に移動することだ。夜の山道は夜光虫が光り月夜のようなだった。

剣ヶ峯の陣地の前方は灌木の台地である。川田隊長と陣地偵察に出ると、近くで地雷が破裂し、手塚分隊

に負傷者が出た。また近くに地雷がある。人声もする。川田隊長が「誰だ」と誰何すると「堀部隊、古渡准尉」と答えがあり、私も怠いで近づき、作業隊の衛生兵「齊藤」と名乗った。堀部隊の兵二人は内臓が飛び出して即死状態だった。古渡准尉は隣村萩平の方でその後散華された。

次の日、私は手塚分隊の負傷者二人を八尋班長の患者班に送り、帰途、書類などを保管してある山本曹長の幕舎に泊まると、夜中に伝令がきて、川田隊長、川又小隊長の地雷による戦死を伝えてきた。山本曹長と陣地に帰ったが遺体は確認できる状況でなかった。

山本曹長が中隊長、野木曹長が小隊長となった。食糧事情は急速に悪化し、一日に糲一握りが支給されるだけだった。米軍とゲリラが陣地内に入り、縦横に落下傘の紐を張り巡らし、これにひっかかると地雷が破裂する仕掛けだった。栄養失調と空腹で部隊を離れて行く兵が多くなった。

どこへ行っても迫撃砲と機銃掃射が追い掛けてきた。戦況は激烈を極めたが、米軍の一方的な戦いになった。

川田隊長戦死後、船舶工兵隊の石毛少佐の指揮下に入った。

雨期に入り、険しい山道もぬかるみと化し、どこを見ても行き倒れの兵隊の姿があった。一日に何千発もの迫撃砲と機関砲、ロケット砲も使用し始めた。二代目隊長石毛少佐も負傷し、歩行困難となり自決を選ばれた。

五月十三日、米軍は島内の日本軍を完全に包囲したと上空から投降勧告のビラをまいた。各部隊は空腹と戦況悪化から戦意が極端に落ち、逃亡者が続出し、作業隊でも朝起きると一個分隊が蒸発ということがあった。塩も皆無となり草を煮ることもできない。水のあるところや岩陰に、どこからともなく栄養失調でからだ全体がむくんだ人たちが集まり、うずくまり、うつ伏せになり、骨と皮だけになり死んでいった。死期が近くなると銀蠅がすき間なくたかる。兵は追い払う気力も無く、死体はすき間無く蛆虫の固まりとなる。まさに生き地獄だ。

マンダラガン山系も奥深く高いところにきてしまっ

た。日本軍の米軍に対する組織的反撃は五月十三日で終息し、前線陣地は敵に委ねた。しかし米軍は攻撃の手を緩めなかった。我々は岩陰、木陰へと逃げながら一八五〇メートルのマンダラガン山の高いところまできてしまった。周囲の樹木の種類も変わり、木肌には苔が付き、そこにシダがぶらさがっていた。地獄谷が近いのか、硫黄の臭いと吹き出す蒸気の音がゴーンと聞こえてくる。ここまできると白骨と冷氷雨にうたれた死体ばかりで、悲惨というほか言葉もない。

遂に地獄谷を見下す断崖まで来た。硫黄の異臭が谷から吹き上がる。それにも増す死臭。朽ち果てた幕舎には半ば白骨化した骸骨の群れがあり、思わず合掌した。地獄谷から流れ落ちる流れには衣服をまとった死体、半裸、全裸の死体が浮きつ沈みつ流れて行く。この流れの底には怪魚が棲息し、死体をむさぼり食っているなどの噂がとんだ。極限を体験した私には、食糧を外国に依存するわが国の将来を思うと、現在の姿で良いのだろうかと思ってしまう。

マンダラガン山も頂上に近づく、土は見られず一

面苔に覆われていた。その苔に霰混じりの雨がしとしとと降る。坂は傾斜が急勾配となる。自分の体を動かすのがやっとの半病人の集まりの中で、少しでも強い人が藤づるを伝わり、助け合い、押し上げ這い上がり、「俺は駄目だからみんな先に行ってくれ」と頼む者も何とか力を合わせて這い上がった。ここまでくると、心と心が最後の寄りどころであった。

腹いっぱい食べて死にたいと離隊した人たちを羨ましく思ったときもあった。しかし、その人たちはほとんどゲリラの手にかかり果てたらしい。マンダラガン山中を二晩かけて桜盆地に向けて山を下りた。桜盆地に出れば食糧はある。ただそれだけが心の支えだった。盆地が近づくとしばらくぶりで太陽が見えてきた。あの山中のじめじめした中で長かった生活、今のところ砲爆も聞こえない。その頃であった。一緒に歩いていた星野茂男氏が倒れて息を引きとった。今の今までの話の返事をして歩いていた星野が倒れて死んだ。人の生命はこんなにあっけないものだろうか。倒れたとき、すぐ脈をみたが完全に無かった。最後の最後に命

の灯を燃えつくしてしまったのだろうか。これまで何十人と最期をみてきたが、今は、衛生兵といっても薬も何も無いので手の施しようもない。しかし今、桜盆地の食糧を目前に臨みながらも、こんなに気を落としたことは無かった。

少し行ったところに、山口部隊の兵が五人休んでいた。私たちに今すぐ五〇〇メートルも行けばイモやトウモロコシがたくさんあるから頑張れと力づけてくれた。彼らは山にいる戦友にイモを届けるところだと言って山に向かった。ふと見ると彼らが去ったあとにイモの皮が落ちていた。急いで口に入れると大いに力がついた気がした。

平地に着いた。幕舎を張る者、イモ掘りに行く者など、何カ月も夢にまで見た食糧に身体中に力が湧いた。その夜は草などを敷いた乾いた地面に寝たが眠れなかった。現実か夢か頭の中は走馬灯のように米軍上陸のときの艦砲、戦車の轟音、川田隊長と小隊長の地雷爆死などが思い出された。隊長はいつも「齊藤ついて来い」といわれ、お供をした。前日の手塚分隊に負傷者がい

なかったら私もこの爆死はまぬがれなかったと思う。周囲を見れば皆同じ思いだったと思う。

私には山中に残っている患者に食糧を届け収容する任務があった。八尋班長や若島衛生兵は随分と苦勞していることだろう。果たして作業隊に何人生存者がいるか見当もつかない。これまで苦勞したのだから一人でも多く生きていくれと祈る思いだった。三日間おいて患者班救出に再びマンガラガンに登った。一日も早く救出せねば犠牲は多くなる。例により石川兵長を長に塚田兵長、銭谷兵長、金川上等兵、同年兵小谷野など十人くらいで、イモを背負った。

高くなるほど山道の両側に死体が増える。生存者には、山を下りれば食糧は十分あるから少しでも早く下るよう声をかけた。地獄谷の上の辺りで八尋班長の患者班を探しあてた。生存者は渡辺軍曹、篠田上等兵など数人だった。私の近所の樽見隆の姿は見られなかった。八尋班長の話では、野戦病院には三十人以上送ったとのことだった。あとで知ったが、野戦病院は七月一日、米軍に単独投降していた。重傷患者を多数預け

られ、衛生材料・薬も無く、このままだと衛生兵と患者を見殺しにすると病院長箕田大尉が「もし戦いに勝った時は、俺の命令で投降したのだから腹を切って責任を取る」と言い、多くの命を助けたと聞いた。我らは残り少ない患者を収容することができた。

その頃の死体は生存者に靴をぬがされていた。自分も頂いたが、その兵隊の名は一忘れることができない。それは山口部隊水野友三郎で、今でも手を合わせている。

アクシデントもあった。山本隊長の命で兵隊二人を連れて奥沢繁二郎氏の救出に山に向かった。ところが途中で白井分隊に会った。すると、白井班長が自分のところの井上上等兵が動けないから連れて下山しろと言う。自分は隊長の命で奥沢を収容しますという、いきなり「貴様、上官の命が聞けないのか」と言っ、横面を二つ叩かれた。あまりにも自分勝手だ。軍紀も乱れているとき、私は拳を握りしめた。脇を見ると人間には這い上がれない絶壁がある。私は黙って山を登った。

桜盆地にいと、亡霊のような姿で山から下りてくる兵がいた。永山利右衛門兵長と片柳俊が現れた。どんな経路で来たか要領を得ない。桜盆地にも何日か平穩の日が続いたが、イモヤトウモロコシが幕舎付近に無くなり、遠くに行かないと採れなくなった。すると、ゲリラの自動小銃に見舞われる。山口部隊から要注意の通達がある。その日、イモ掘りに行った兵がゲリラに襲われたため、警戒兵から「状況が悪化したので急いで移動しよう」と連絡があり、急いで幕舎をたため、全員移動を始めた。

私は山口部隊に連絡に行った八尋班長の背囊と二人分の装具をかついで逃げ出した。途中ゲリラの姿が見えるほど接近したが、辛うじて脱出した。安全地帯まで来て点呼をとると、渡辺軍曹と箕田上等兵の姿が見えない。地獄谷を越えた二人であったが本当に残念だった。また二人の犠牲者が出てしまった。夕方やっとポランに着き、幕舎を張り、落ちつくことになった。幕舎は、指揮班で本橋軍曹、主計の森川伍長、塚田兵長、同年兵の星野幸吉君の五人の幕舎だ。食糧の収集

は塚田氏、星野氏、私の三人である。今度は山口部隊に配属された。

山口部隊は戦闘部隊なので、少数ゲリラには驚かないが生存者は少ないようだ。すぐ隣で点呼を聞くと中隊長以下二十人である。暗然として声もでない。ネグロス島で一番古い警備隊であり、ほんとうに大きな犠牲に頭の下がる思いだ。犠牲者はあとをたたない。若島衛生兵が衰弱し、静かに昇天された。土葬し、墓印に川石を置いた。長期にわたる食塩と動物性蛋白質不足で、全員が体調を悪くするが、手の打ちようが無かった。続いて中町平吉氏が亡くなった。彼は私と歳の差がある。故郷には妻子も待っているだろう。いつか二人のとき、母を負って宮城を拜んだ話をしてくれ、頼山陽のような人だと私の心に残っている。

その頃幕舎前の小さい川に、ハゼまたはゴロという魚が見られた。さっそく、有線通信の電線で釣針を作り、ミミズで釣って、一人二、三匹だが夕食に供することができた。夕食のとき、故郷の食べ物の話が必ず出た。私の故郷は霞ヶ浦のほとりなので、梅雨どき小

川にあがる鮎の話をした。森川班長は群馬の沼田出身なので、秋になると農家のばあさんがいなごの煮干を売りにきて、それを佃煮にして酒の肴にする話などいっつも行きつくところは食べ物の話だった。

その故郷へは帰れるのか、一生をこの山中で送るのか、それより自分がいつまで生きられるのか、心細いかぎりであった。その頃他の部隊が、原住民が盆地から逃げるとき置きざりにして野生化した水牛を食用に捕えたという話を聞き私の隊からも出かけた。一回目は広い草原を三日ぐらい探したが失敗し、二回目で成功、小谷野勝が飯盒いっぱいの肉を持って運搬の応援を求めてきた。西村元治郎が肉屋に勤めていたため解体し、十人ぐらいで運び、山口部隊にも届けた。何カ月ぶりかの嬉しいできごとだった。

静かな日が続いた。栃木県田沼町出身の阿部和一郎氏が自分の死期を知ってか「南無妙法蓮華経」と、お経を唱えて息を引きとった。土饅頭の数は増えるばかりだ。お盆の月だがここには何の行事も無い。

山口部隊から敵機とゲリラに注意するよう通達があっ

た。ゲリラ襲撃に備えて幕舎周辺の道路に障害物を作る作業に山口部隊に応援に出た。

八月六日、B 29の大編隊が上空を通過し、カリスク方面の島本隊が爆撃され、死傷者が出たとの情報が入った。

八月十六日、米軍機から「日本が連合軍に無条件降伏した」とのピラがまかれた。急いで山を下りて来るようにという内容のものもあった。こんなことがあり得るだろうか。きっと米軍の謀略だ。このところ米軍機が飛ばないのはどこか日本軍が優勢になり、米機がそちらに行ったのだ、などと話は飛躍した。敗戦当時の経緯は、我ら兵隊には知る由も無いが、八月末兵団から軍使を出し、米軍から通信機をもらい受けてきて、各方面の情報を得て、祖国の敗戦を知ることができた。話は聞こえたが細部を知ることができたのは、島村工兵隊の衛生下士官・里見高義氏の個人体験記「犠牲」によってだった。